

弁護士 **山田 義雄**氏 (高校19期)

☆☆立高生の皆様へ☆☆



嘗二叔父(右)と共に

1 はじめに

卒業して来年で50年になる。「思えば遠くに来たものだ」と感慨ひとしおである。そして高校時代というのは、人生の中でやはり最もまぶしい懐かしい時期であろう。その時期を、そう一度しかないその時を大いに満喫し、良き友と良き思い出を得て旅立って欲しいと願ってやまない。

2 立高時代

1年生はバスケットに明け暮れた。しかし、無理をして膝を痛め2年生前半で断念。2年生後半は、たまたま生徒会活動にかかわる。その中で長く懸案事項であった「全定図書館合併問題」に取り組んだ。現役の皆さんにとっては図書館が1つで、全日制も定時制も利用できることは当然のことだろうが、昭和40年当時は違った。

校舎の改築期で、これを逸すとチャンスはないというタイミングで定時制生徒会長となった小林佳夫さんと全日制の我々と同じ目標を持って活動することになった。図書館が全日合同となっている都立高校(6~7校)を合併委員の生徒が手分けして訪問し、データを取り、それを元に双方の生徒会の決議を行い、双方の職員会議での決定に到った。「合併成る」との一報を得たときの感慨は忘れられない。

「教育の機会均等」という素朴で青臭いスローガンではあったが、実務的(ことに司書教諭の高橋先生)には、とても大変な負担をおかけしたことは、本当に申し訳なかったと思っている。

3 司法試験の受験

「弁護士になりたい」と思ったのは、高校時代の途中からである。その大きなきっかけは、私の叔父(湯浅嘗二)が当時私立高校の数学の教員をしながら、司法試験の受験中だったことによる。昭和2年生まれで、軍国少年から戦後の学生運動、そして就職難を経て、勤務先の学園理事長が小島利雄弁護士。その小島先生は、大きな事件ではしっかり報酬は得るが、お金の無い人には、ほとんど無報酬でもよしとしていたという。その姿に叔父は深く感銘を受け、30歳をいくつか過ぎての受験スタート。結局41歳で合格した。そして、40年近く青臭く現役で頑張っていた。

かく言う私も、中大を卒業後、市役所の警備員をしながら、ようやく、32歳で合格した。昔はそんな受験生は少なくなかったのだが…。

4 弁護士の仕事

さて本題である。書きたいことはいろいろあるが、33年間となる弁護士生活については、「本当に好きな仕事をやれて幸せ」という思いである。

「弱者の味方になりたい」と司法研修所の志望動機に書いた。しかし弱者にもいろいろいて、だらしなかったり、ずるかったり、又、我が儘な依頼人も少なくない。しかし、それでも、この稼業は面白い。

「人間は自分自身のことは徹底的に弁護できないものだ。そこに弁護士の役割がある」とは、叔父が尊敬した小島弁護士の言葉。「頼られているという実感こそがやり甲斐」信頼する先輩の言葉。

現在の法曹界は色々問題がある。若い後輩達にとって大変な途でもある。しかし志を持った皆さんが夢を持って目指して欲しいと、そう、年寄りの独り言である。

なお、趣味のことを一言、58歳でチェロを習い始めた。今年で10年目、本当に上手くはならない。しかし、楽しい。恥ずかしながら、そんな写真を一枚。



チェロを弾く(音さえ出なければ...)